大学生の初対面会話における日本語母語話者と韓国人日本語学習者の話題選択と話題展開

Topic Selection and Topic Development of Japanese Native Speakers and Korean Learners of Japanese in First Face–to–face Conversation among College Students

小　林　友　美
KOBAYASHI Tomomi

〔要旨〕
本研究は、母語場面と日韓の接触場面の大学生の初対面会話を対象に、日本語母語話者と韓国人上級日本語学習者の話題選択と話題展開を分析した。その結果、会話参加者は同じ大学の学部と共通点があり、先輩後輩の人間関係の構築のため、共通性の高い話題を選択し、母語話者の学年の上位者が積極的に話題を開始、展開する傾向があることが分かった。また、母語場面の話題展開は、一つの話題において互いに質問をし合う「相互型」であるのに対し、接触場面は多くの話題を提示し、先輩が質問で話題を導入する「一方方向型」になる傾向があり、母語話者と韓国人日本語学習者とで話題展開の方法及び参加意識が異なることが確認された。さらに、母語話者は聞き手の役割にも重きを置き、あいづちや共感等様々な表現を用いて話題展開、調整をしていた。この分析を通し、会話教育において、相互作用に基づいた「相互型」の話題展開の方法を学習する必要性を示した。

Key word: 初対面会話、話題選択、話題展開、参加意識、相互作用

1. 本研究の目的

初対面会話では、新しい人間関係を構築していくために、積極的に会話に参加して情報交換をし、相手に興味を示しながら話題を展開する必要がある。佐々木（1998）は、初対面の異文化間コミュニケーションの場面では、日本人が「インタビュー・スタイル」を取り、日本人同士では、「話し合いスタイル」を取るという傾向があると指摘している。また、小林（2018）は、初対面場面の情報収集の談話を分析した結果、日本語母語話者は、一つの話題において発話を重ねて掘り下げる談話展開の方法を取るのに対し、韓国人日本語学習者は、「質問 ── 応答」を繰り返す談話展開の方法を取る傾向があることを明らかにした。このように異文化間では、話題展開の方法が異なることがあり、これにより、情報や意図を正確に伝えることや解釈することが困難となり、円滑なコミュニケーションを成立させることが難しくなる場合がある。

そこで、本研究は、日本語の会話教育に応用するための基盤的研究として、日本語母語話者と韓国人上級日本語学習者の大学生の初対面会話を対象に、話題選択と話題展開の特徴を明らかにすることを目的とする。また、会話参加者がどのような意識で会話に参加し、その言語行動を取ったかについても着目する。

2. 先行研究

日本語の初対面会話を対象とした話題に関する先行研究には、話題選択の三牧（1999a）、話題展開の宇佐美・嶺田（1995）、中井（2002）、三牧（1999b）等が挙げられる。

三牧（1999a）は、初対面の日本語母語話者の大学生会話を対象に分析し、表 1 の 8 話題カテゴリーと 23 話題項目からなる「大学生初対面会話における話題選択肢リスト」を挙げている。

表 1　大学生初対面会話における話題選択肢リスト

	話題カテゴリー	話題項目
①	大学生活	授業、サークル活動、キャンパス、バイト、試験・単位、休暇、遊び（コンパ等）
②	所属	学部、学科、サークル、学年
③	居住	自宅 / 下宿、通学、現在居住地
④	共通点	共通の知人、共通体験（本実験の被験者）
⑤	出身	出身地、出身校
⑥	専門	研究テーマ・卒論 / 修論、専攻
⑦	進路	就職、進学
⑧	受験	受験・塾

（三牧 1999a、51）

本研究でも、三牧（1999a）の分類を参照し、話題選択の分析を行なう。本研究でも同じ大学生の会話を対象としているため、同様の話題が出現する可能性が高いと予想する。ただし、三牧

（1999a）は、他学部の学生同士であるのに対し、本研究は同じ学部生同士の交流会話であるため、より共通性がある話題が選択されると予想される。また、本研究は日本語母語話者のみならず、日本語学習者も対象としているため、日本語学習者独自の話題が出現する可能性がある。

話題展開の先行研究である宇佐美・嶺田（1995）は、初対面会話において、話題の展開パターンを「質問 ── 応答型」と「相互話題導入型」に分類している。「質問 ── 応答型」とは、参加者の一人が質問形式で話題を導入し、もう一人がそれに答える型であり、「相互話題導入型」とは、参加者二名が互いに話題を導入しあい、参加者の一人が話題を導入すると、もう一人がそれに答えた後、それに関連した新しい話題を添えるという型であるという。

中井（2002）は、宇佐美・嶺田（1995）の枠組みを参考に、初対面会話の話題開始部で用いられる質問表現と会話展開の型に関して分析を行なった。中井（2002）は、会話展開の型の「質問 ── 応答型」を、参加者同士が同程度に質問表現で話題を開始している場合の「相互型」と、参加者のどちらかがもう一方の参加者よりも著しく質問表現で話題を開始している場合の「一方方向型」に分け、「情報提供話題開始型」と合わせて分類した。その結果、母語話者同士では、「情報提供話題開始型」と「相互型の質問 ── 応答型」が見られ、接触場面では、「一方方向型の質問 ── 応答型」が多く見られたとしている。本研究でも宇佐美・嶺田（1995）、中井（2002）を参考に、「質問 ── 応答型」を「相互型」と「一方方向型」に分類する。

会話の参加者の上下関係と情報交換との関係に着目した三牧（1999b）は、異学年大学生、大学院生の初対面の会話を分析した。その結果、学年の上位者が話題を導入、展開等に関する話題管理をする傾向があるとした。本研究も同様に、大学生の初対面会話を対象とするため、話題選択や話題展開において、類似した結果が出ると予想されるが、三牧（1999b）の会話参加者は他学部のペアが多いのに対し、本調査の会話参加者は、同じ学部のペアであるため、先輩と後輩の上位者の役割が顕著に表れるのではないかと考えられる。

次に、本研究と同様に韓国語母語話者を対象にした先行研究として髙木（2013）を挙げる。髙木（2013）は、日本語と韓国語の自然談話に現れる「繰り返し発話」の「発話形式」と「機能」について分析した。「機能」の分析においては、日本語では「共有型」、韓国語では「要求型」の談話展開が多く現れることを明らかにし、日本語話者が「くり返し発話」により先行発話に対する自己の感情や思考を表し、turn の譲歩を促すことで、結果的に対話者の発話を引き出すのに対して、韓国語話者の積極的な問いかけにより説明や確認を要求するという談話展開におけるスタイルの違いについて論じている。本研究の接触場面でも韓国人日本語学習者を対象としているため、髙木（2013）の韓国語母語話者の母語の談話展開のスタイルが日本語の会話にも影響される可能性があると予想する。

3. 研究方法

本研究は、同じ学部の 1 年生と 2 年生の異学年の大学生同士の自然会話を対象とする。これは、

同じ学部の先輩と後輩の初対面の交流場面であるため、共通話題や情報交換が多く、自然な状況で会話が展開されると予想したためである。

表 2 に資料の概要を示す。日本語の母語場面の資料 1 〜資料 3 の 3 資料と、日韓の接触場面の資料 4 〜資料 6 の 3 資料からなる全 6 資料（各資料 約 15 分間）を収集 [1] した。会話参加者は、日本語母語話者の 2 年生の先輩 2 名（先輩 J1、先輩 J2）、1 年生の後輩の日本語母語話者 3 名（後輩 J1、J2、J3）と韓国人上級日本語学習者 3 名（後輩 K1、K2、K3）である。

表 2　資料の概要

資料	会話参加者と発話数	発話総数
資料 1（母語場面）	先輩 J1（112 発話 /54.4%）・後輩 J1（94 発話 /45.6%）	206 発話
資料 2（母語場面）	先輩 J1（159 発話 /53.4%）・後輩 J2（182 発話 /46.6%）	341 発話
資料 3（母語場面）	先輩 J2（119 発話 /53.1%）・後輩 J3（105 発話 /46.9%）	224 発話
資料 4（接触場面）	先輩 J1（122 発話 /56.2%）・後輩 K1（95 発話 /43.8%）	217 発話
資料 5（接触場面）	先輩 J1（96 発話 /55.8%）・後輩 K2（76 発話 /44.2%）	172 発話
資料 6（接触場面）	先輩 J2（150 発話 /55.1%）・後輩 K3（122 発話 /44.9%）	272 発話

会話を収集するにあたり、参加者には、「同じ学部の学生同士、交流を目的に 15 分間、自由に会話をしてください」と指示をし、録画、録音をした。会話終了後、出身や日本語学習歴、普段の日本語母語話者 / 日本語学習者との接触経験等を問うフェイスシート [2] と会話の感想や相手の印象、会話をする際に気を付けた点等を問う会話感想シート [3] を記入してもらい、別日に、録画と文字化資料 [4] を見ながらフォローアップインタビュー（以下、FUI）[5] を実施した。また、FUI までに、話題区分調査の結果を提出してもらった。話題区分調査とは、鈴木（1995）の「内容のまとまり」による区分をスクリプトに記入し、各区分の内容を端的に示す「タイトル」を付ける調査のことである。話題の切れ目は、会話参加者と筆者の計 3 名の話題区分調査の結果と、鈴木（1995）による「内容区分」の基準を参考に判断した。

話題選択を分析するにあたり、三牧（1999a）の「大学生初対面会話における話題選択リスト」を参考に、本研究の会話に応じて一部追加、修正したリストで話題を分類した。本研究は日本語母語話者の他、日本語学習者も分析対象としているため、三牧（1999a）とは異なる話題カテゴリーが出現することが予測される。話題カテゴリーに分類した後、確定した話題区分調査の結果に、話題ごとに話題開始者を示し、話題展開の型を認定した。中井（2002）の会話展開の型は、会話全体を対象としているが、本研究の話題展開の型は各話題を対象としている。

4. 分析結果

4.1　発話数

表 2 の発話総数をみると、接触場面 3 資料より、母語場面 3 資料の発話総数のほうがわずかに

多いという結果になった。最も多いのは母語場面の資料 2 の 341 発話で、少ないのは資料 5 の 172 発話である。また、参加者別にみると、全 6 資料で、先輩の発話数の割合が 50%以上で後輩より若干多く、先輩のほうがやや積極的に会話に参加しているといえる。これは、三牧（1999b）の学年の上位者の話題管理の傾向と同様の結果である。FUI で先輩 J は、「同じ学部の先輩なので、リードしたほうがいいのかなと思った」と述べていた。次に、後輩の発話数に注目すると、後輩 J の 3 名は 40%後半で、後輩 K の 3 名は 40%前半である。後輩 K より後輩 J のほうがわずかであるが、発話数が多い。これにより、後輩 J のほうが後輩 K より、積極的に会話に参加していることが分かる。

4.2　話題選択と参加意識

話題区分調査は、1 資料につき、参加者 2 名と筆者の計 3 名の区分の一致により話題を区分した。話題は、「開始の挨拶」と「終了の挨拶」を除いた話題について、三牧（1999a）の話題選択肢リストを一部追加、修正したリストを基に分類した。表 3 に母語場面と接触場面別の話題選択の結果を示す。各資料に出現した話題カテゴリーと話題項目を多い順にまとめ、合計を記す。話題項目には（　）に話題数を示す。

表 3　母語場面と接触場面の話題選択の結果

資料	話題カテゴリー	話題項目
母語場面（資料 1 ～資料 3）	大学生活	授業（3）、レポート（2）、友達（2）、サークル（2）、ボランティア（1）
	留学	留学（2）、語学学習（1）
	出身	出身地（1）
	進路	日本語教師になろうとしたきっかけ（1）
	話題カテゴリー数：4	話題項目数：9
接触場面（資料 4 ～資料 6）	大学生活	授業（6）、サークル（1）、アルバイト（1）、学生サポーター（1）
	日本の生活	カルチャーショック（2）、おすすめの日本の食べ物（1）、本大学のイメージ（1）
	個人の経歴や経験	本学部を選択した理由（1）、入試の方法（1）、挫折したこと（1）
	留学	留学（2）、語学学習（1）
	出身	出身地（2）
	共通点	共通の友達（2）
	話題カテゴリー数：6	話題項目数：14

母語場面の 3 資料の話題カテゴリー数は 4 カテゴリーで、話題項目数は 9 話題である。一方、接触場面の 3 資料の話題カテゴリー数は 6 カテゴリーで、話題項目数は 14 話題である。従って、接触場面のほうが話題数が多いということが分かる。選択された話題カテゴリーに注目すると、

母語場面と接触場面で共通している話題カテゴリーは、「大学生活」（母語場面 10 話題、接触場面 9 話題）、「留学」（母語場面 3 話題、接触場面 3 話題）、「出身」（母語場面 1 話題、接触場面 2 話題）である。会話参加者は同じ学部であるため、学部の必修科目の「授業」や学部必須の「留学」に関しての話題が多く、三牧（1999a）の結果と比べ、共通性の高い話題が選択されたことが明らかになった。接触場面の特徴は、母語場面にはない話題カテゴリーの「日本の生活」、「個人の経歴や経験」、「共通点」が出現したことである。「日本の生活」、「個人の経歴や経験」は、三牧（1999a）には見られない話題カテゴリーであり、本研究の分析対象の特徴といえる。「共通点」の話題に関しては、接触場面の資料 4 で、先輩 J1 が後輩 K1 に「サークルの共通の友達」と「韓国語の授業の友達」の話題を出している。共通の話題の提示は、互いの心的距離を縮める効果があると推察する。また、母語場面には、「レポート」の書き方について後輩が先輩にアドバイスを求める発話や、先輩が所属している「日本語教室」のボランティアについて参加希望の後輩が情報を求める発話が確認され、先輩と後輩の会話特有の話題が確認された。

表 4 に話題と話題展開の型の結果を示す。資料ごとに、話題の番号、話題数の合計、話題のタイトル、話題開始者、話題展開の型「相互型 / 一方方向型」を表す。

資料別に話題数に注目すると、母語場面の話題数は 6 ～ 8 話題で、接触場面は 9 ～ 11 話題と多いことが分かる。母語場面より接触場面のほうが話題数が多く、取り上げる話題が多岐に渡るということである。FUI で、後輩 K3 は、「沈黙をしないように、話題を振るようにした」と話しており、様々な話題について話すことを意識していたようだ。また、接触場面では質問に対する応答発話が少なく、話題の継続や発展ができずに、次の話題に移行した発話が確認された。これらのことが母語場面と接触場面の話題数の差に影響を与えていると考えられる。

4.3　話題展開と参加意識

表 4 の話題開始者に注目すると、後輩より学年の上位者である先輩のほうが話題を開始していることが確認できる。「開始の挨拶」は母語場面が 1 資料、接触場面が全 3 資料、「終了の挨拶」は全 6 資料で先輩である。また、「開始の挨拶」と「終了の挨拶」を除いた話題において、話題開始者が先輩で、「一方方向型」の話題は母語場面より接触場面が多く、母語場面は 15 話題中 1 話題であるのに対し、接触場面は 24 話題中 10 話題が確認された。これにより、接触場面では先輩 J が主導権を握り、積極的に会話を進行する傾向があることが分かる。話題展開の型は、接触場面がより母語場面のほうが「相互型」が多く、母語場面は全 21 話題中 19 話題（90.5%）、接触場面は全 30 話題中 15 話題（50%）である。

次に、母語場面の「相互型」と接触場面の「一方方向型」の話題展開について、発話例とともに分析する。例 1 に資料 1 の母語場面の「相互型」の話題展開の発話例を示す。左から、発話番号、発話者、発話例の順である。注目する先輩の発話例に下線を、後輩の発話例に二重線を付ける。

表 4　話題と話題展開の型

話題	資料 1	資料 2	資料 3	資料 4	資料 5	資料 6
1	開始の挨拶	開始の挨拶	開始の挨拶	開始の挨拶	開始の挨拶	開始の挨拶
	後輩 J1	先輩 J1	後輩 J3	先輩 J1	先輩 J1	先輩 J2
	相互型	相互型	相互型	相互型	相互型	相互型
2	レポートの書き方	サークル	出身地	サークルの共通の友達	学部を選択した理由	後輩 K3 の出身地
	後輩 J	先輩 J1	先輩 J2	先輩 J1	後輩 K2	先輩 J2
	相互型	相互型	一方方向型	一方方向型	一方方向型	一方方向型
3	レポートについて相談できる友達	日本語教室	1 年生の授業	授業	学部の授業 1	入試の方法
	先輩 J1	後輩 J2	先輩 J2	先輩 J1	先輩 J1	先輩 J2
	相互型	相互型	相互型	一方方向型	相互型	一方方向型
4	レポートの内容	日本語教師を目指したきっかけ	サークル	アルバイト	関心がある分野	学部の授業
	後輩 J1	先輩 J1	先輩 J2	先輩 J1	後輩 K2	後輩 K3
	相互型	相互型	相互型	一方方向型	一方方向型	相互型
5	留学	語学学習	留学	サークル	学部の授業 2	学生サポーター
	後輩 J1	後輩 J2	先輩 J2	先輩 J1	後輩 K2	先輩 J2
	一方方向型	相互型	相互型	一方方向型	相互型	一方方向型
6	終了の挨拶	留学生の友達	第二外国語	留学先の大学	カルチャーショック	第二外国語
	先輩 J1	先輩 J1	後輩 J3	後輩 K1	先輩 J1	後輩 K3
	相互型	相互型	相互型	相互型	一方方向型	相互型
7	—	終了の挨拶	学部の授業	語学学習	カルチャーショックの克服方法	留学
		先輩 J1	先輩 J2	先輩 J1	先輩 J1	後輩 K3
		相互型	相互型	一方方向型	一方方向型	相互型
8	—	—	終了の挨拶	韓国語の授業	挫折したこと	先輩 J2 の出身地
			先輩 J2	後輩 K1	後輩 K2	後輩 K3
			相互型	相互型	一方方向型	一方方向型
9	—	—	—	韓国語の授業の共通の友達	終了の挨拶	大学のイメージ
				先輩 J1	先輩 J1	後輩 K3
				相互型	相互型	相互型
10	—	—	—	終了の挨拶	—	おすすめの日本の食べ物
				先輩 J1		後輩 K3
				相互型		一方方向型
11	—	—	—	—	—	終了の挨拶
						先輩 J2
						相互型
合計	6 話題	7 話題	8 話題	10 話題	9 話題	11 話題

（例 1）母語場面 資料 3 の発話例（話題 4「サークル」の前半部分）

75	先輩 J2	え、今、サークルとか何か入ってますか。
76	後輩 J3	何か、一応、L（サークル名）には入って、みたいな。
77	後輩 J3	けど、他の団体もちょっと考えてはいたんですけど、何か、課題とバイ＝トとみたいになったら結構しんどいかなと思って、それで、それだけ＝です。
78	先輩 J2	大変ですよね。
79	後輩 J3	何か入ってますか。
80	先輩 J2	私、今、弓道をやってて、サークルで。
81	後輩 J3	おお、かっこいい。
82	先輩 J2	大学入ってから始めました、弓道。
83	後輩 J3	そうなんだ。
84	後輩 J3	週何回くらいやってるんですか。
85	先輩 J2	週 1 回ぐらいで。
86	先輩 J2	もう緩く。
87	後輩 J3	1 回でもいいんですか。
88	先輩 J2	そう、そうなんですよ。
89	先輩 J2	何か自由に参加できるサークルで。
90	後輩 J3	えー、何かもっと厳しそうな感じするのに。
91	先輩 J2	でもほんとにサークルによると思います。
92	先輩 J2	サークルごとに厳しいサークルもやっぱあるし、緩い。

例 1 は「サークル」についての話題である。75 で先輩 J2 が後輩 J3 にサークルに入っているか質問をし、76 で後輩 J3 が回答している。78 で先輩 J2 は課題やアルバイト、サークルの両立について「大変ですよね」と共感をし、その後、79 で後輩 J3 が先輩 J2 に同じ質問をする。80 の先輩 J2 の応答に対し、後輩 J3 は、81 で「おお、かっこいい」と反応して関心を示し、84 で「週何回くらい活動をしているのか」と問いかけ、「週 1 回の活動でもいいのか」と応答確認で質問を重ねている。さらに先輩 J2 の回答に対して 90 で「もっと厳しそうな感じがするのに、自由に参加できるのですね」と予想外であったと感想を述べている。このように、「相互型」の話題展開では、両者からの質問の他、応答に対してあいづちや感想を述べて反応し、再質問をする等、話者交代が著しい活発なやりとりが展開される。FUI で後輩 J3 は、「あいづちや反応を意識した」、「積極的に質問をした」と述べており、意識的に積極的に会話に参加していることが確認された。

前述の通り、「相互型」の話題展開の発話は、母語場面に多く確認されたが、初対面の会話では、情報要求の質問を一方的にするだけではなく、例 1 の 79 のように同じ質問を相手にも投げかけて情報交換をして一つの話題を共有することがある。これにより、互いの心的距離を接近させて

いる。また、相手の応答に対して感想を述べたり、共感したりして、積極的に相手や話題に関心を示すことで、相手の発話を促している。このような相手を意識した相互作用のある「相互型」の話題展開は、円滑なコミュニケーションや人間関係構築のための会話のストラテジーとして重要であると考える。

次に、接触場面の「一方方向型」の話題展開の発話例を例 2 に示す。

（例 2）接触場面 資料 6 の発話例（話題 1「開始の挨拶」と話題 2「後輩 K3 の出身地」の前半部分）

1	先輩 J2	お願いします。
2	後輩 K3	初めまして。
3	先輩 J2	初めまして。
4	先輩 J2	J2（名前）です。
5	先輩 J2	お願いします。
6	後輩 K3	私は I 学部（学部名）1 年生、K3（名前）と申します。
7	後輩 K3	よろしくお願いします。
8	先輩 J2	お願いします。
9	先輩 J2	<u>え、どこ出身ですか。</u>
10	後輩 K3	韓国のソウル出身です。
11	後輩 K3	だから何か日本語がそんなに上手ではないです。
12	先輩 J2	いや、いや、いや、うまいです、うまいです、うまいです。
13	先輩 J2	<u>え、いつ来たんですか。</u>
14	後輩 K3	4 月 3 日に入国しました。
15	先輩 J2	<u>え、日本語は韓国で勉強して、それから日本に来た？</u>
16	後輩 K3	はい、そうですね。
17	後輩 K3	はい。塾に 2 年間ほど勉強して、何か留学試験を受けて。
18	先輩 J2	<u>A 大学（大学名）に？</u>
19	後輩 K3	はい。
20	先輩 J2	へえ、そうなんですか。
21	後輩 K3	でも、何か成績が十分ではないとか、塾はそのように判断したんですが、＝何か、何で A 大学が私に合格の票を与えたか分からないです。
22	先輩 J2	いやいや、いやいや、うまいですよ。
23	先輩 J2	<u>え、4 年間、A 大学に通うってことですか。</u>
24	後輩 K3	はい。私は正規留学生だから。
25	先輩 J2	<u>じゃあ、もう、これからはずっと韓国からオンラインで受けるとかはな＝く、日本に 4 年間住んで A 大学に通うっていう感じですか。</u>

26　　後輩 K3　　そうですね。

例 2 は、8 までが「開始の挨拶」の話題で、9 から「後輩 K3 の出身地」の話題に入る。挨拶の後、先輩 J1 が話題を進行し、後輩 K3 に 9 で「どこの出身か」、13 で「いつ来日したのか」と質問している。後輩 K3 はその質問に答え、それに対して先輩 J2 は、15、18 で再度質問をしている。また、先輩 J2 は 23 と 25 で「〜ってことですか」、「じゃあ、〜っていう感じですか」という表現で後輩 K3 の応答を確認する質問をして、相手に理解を示し、話題を展開してまとめている。このように、例 2 では、先輩 J1 が主導権を握って会話を進行している。日本語母語話者の会話の主導権については前述したが、FUI で先輩 J2 は、「始めの話題は主導して、途中で話しやすい雰囲気になったら、相手に主導権を渡そうとした」と自身の言語行動についてコメントしていた。後輩 K3 も「前半は先輩が話して、だんだん自分も会話に参加することができた」と認識しており、表 4 の資料 6 の結果や文字化資料からも、話題 4 から話題開始者となり、「相互型」の話題展開に移行していることが確認できる。また、先輩 J2 は会話感想シートの「11. 会話をする時、どんなことに気を付けましたか」という設問に「相手が何か言いかけている時、伝えづらそうにしている時は、言葉のサポートを加えながらも、できるだけ待つようにしていた」と回答しており、FUI でも、「相手が言いたそうなことを確認した」と話していたため、異文化間での言語ホストとしての調整を意識して会話に参加していることが分かった。FUI で後輩 K は、「間違えないようにしよう、丁寧に話そうと緊張していた」と述べていたため、このような日本語母語話者の調整は日本語学習者の心的負担を軽減させ、発話を促すと考えられる。

23 と 25 のような応答確認の発話は、日本語母語話者には複数確認されたが、日本語学習者の発話にはあまり見られなかった。そのため、日本語学習者には応答確認の表現の運用が難しいのではないかと示唆され、日本語の会話教育で取り扱う必要がある。

以上のように、母語場面には、同じ話題について互いに質問し合い、情報共有、情報交換をする「相互型」の話題展開の傾向があるのに対し、接触場面には、複数の話題について先輩 J が質問等で話題を開始し、後輩 K が答えるという「一方方向型」の話題展開が多く見られた。これは、中井（2002）の会話展開の型[6]や、佐々木（1998）の会話のスタイル[7]と同様の結果である。接触場面では、先輩 J は後輩 K に発話する機会を与え、発話を促すために、積極的に質問をするという言語行動の調整をしているのではないかと考えられる。FUI でも先輩 J と後輩 J は、「共通の話題が見つかったら、それについて話を掘り下げて詳しく話す」と答えていたのに対し、後輩 K は、「初対面では、相手とたくさんの話題について話す」と述べていた。つまり、日本語母語話者と韓国人日本語学習者とでは、話題展開の方法及び会話の参加意識が異なるといえる。FUI で後輩 K は、「留学生だから質問されて、答えることに慣れている」、「先輩が話題を振ってくれるのを待っていた」等と述べていたため、会話の参加意識が受け身になりがちであることが明らかになった。このことも、先輩 J の質問と後輩 K の応答という「一方方向型」の話題展開が多くなった原因と考えられる。また、髙木（2013）の韓国語母語話者の韓国語の「要求型」の談話

展開の特徴が、日本語の会話にも影響した可能性も示唆される。

次に、例 3 で、母語場面の共感、あいづち、共同発話の聞き手の役割について取り上げる。

（例 3）母語場面の資料 1 の発話例（話題 2「レポートの書き方」の後半の一部分と話題 3「レポートについて相談できる友達」の前半部分）

80	後輩 J1	何か授業がちょっと分かんなくて、あんまり。
81	後輩 J1	何かいろんなこと言ってるけど、何となく理解が深くなくて、ちょっと＝不安。
82	先輩 J1	ああ、そうか、そうか、何か、その、友達と、何か、その課題について＝話す機会とかってある？
83	後輩 J1	何か、私、その Z（科目名）を取ったのが、あの、いない。
84	後輩 J1	周りにあんまりいない。
85	後輩 J1	他の学部が多いから。
86	後輩 J1	ちょっとやばいと思って、友達がいない。
87	先輩 J1	うんうんうんうん、分かる。
88	先輩 J1	私も 2 年生だけど、Z（科目名）の授業を取ってて、やっぱりそれでレポ＝ート書いてって言われたときに、周りに友達がいなくて、何か自分で＝何とかしなきゃいけないから、
89	先輩 J1	ああ、そっかー。
90	後輩 J1	Z（科目名）、結構大変だなって、ちょっと思って。
91	先輩 J1	確かに。
92	先輩 J1	なんか Z（科目名）って、結構、その、学部を越えて勉強できるから楽し＝いけど、やっぱりそうだよね。
93	後輩 J1	うん、うん。
94	後輩 J1	何か、そういう、Z（科目名）で友達とかつくったことありますか。
95	先輩 J1	ないです。
96	後輩 J1	ない。
97	後輩 J1	話し掛けられないです。
98	先輩 J1	そうだよね、うん、何か、やっぱり友達がいっぱいできたのは K（科目名＝）、取ってる？
99	後輩 J1	K（科目名）取ってます。
100	先輩 J1	K（科目名）はディスカッションが多いから、やっぱり必然的に、
101	後輩 J1	確かに話さなきゃいけない。
102	先輩 J1	そうそう、そうそう、そう。

例 3 は、「レポートについて相談できる友達」の話題である。80、81 で後輩 J1 が授業の内容が難しくて不安であるという悩みについて、先輩 J1 がアドバイスをするという一つの話題を掘り下げて展開される発話である。先輩 J1 は、後輩 J1 の悩みについて 82 で、「授業でレポートについて友達に話す機会はあるのか」と質問して解決策を見つけようとする。それに対し、83、84 で後輩 J1 が「（相談する友達が）いない」と答えている。後輩 J1 がこの科目は他学部の学生が多く、友達が作りにくいことを話すと、先輩 J1 は 87 で「うんうんうんうん、分かる」、91「確かに」、92 と 98「そうだよね」と複数の表現を用い、共感を示している。さらに、88 では自身の体験談も話しながら、強く共感をしている。FUI で先輩 J1 は、88 の体験談について、「共感しようと自分の状況を話した」と振り返っていた。また、後輩 J1 は FUI で「先輩が相談に乗ってくれて嬉しかった」とコメントしていた。このような共感の表現や共感の話題は、母語場面でも接触場面でも確認されたが、接触場面では、先輩 J の発話に多い傾向がある。相手と良好な関係作りのためにも共感の発話や話題は重要となるため、日本語の会話の授業では、会話をする中で共感することを意識化するとともに、表現や方法について取り上げることを提案する。

次に、あいづちに注目する。先輩 J は、82「ああ、そうか、そうか」、89「あー、そっかー」、91「確かに」、98「そうだよね」、102「そうそう、そうそう、そう」等、様々なあいづち表現を用いて反応している。これは相手の話に理解を示すのみならず、後輩 J1 の会話に興味を示す役割もある。以上のように、日本語母語話者は、質問をするのみならず、あいづちや反応、共感をする等、聞き手の役割にも重きを置いて会話に参加し、「相互型」の話題展開をしている。日本語の会話教育では、聞き手の役割を意識させ、反応の表現のバリエーションを増やして適切なタイミングで相手の発話に反応できるよう練習する必要がある。

最後に、共同発話についてである。100 で先輩 J1 が「K（科目名）はディスカッション多いから、必然的に」と言った後に、101 で後輩 J1 は、「話さなきゃいけない」と発話を繋げ、先輩 J1 は「そうそう、そうそう、そう」とあいづちをしている。この発話により、後輩 J1 は先輩 J1 の言いたいことを理解、予測していることを示し、テンポよく発話が継続していることが分かる。双方が互いに協力し合って話題を展開しているこのような発話は、「相互型」の話題展開の特徴といえる。

本節では母語場面の「相互型」と接触場面の「一方方向型」の話題展開について、発話例とともに分析した。会話参加者は様々なストラテジーを用い、初対面会話において話題展開をしていることが明らかになった。

5. 結論

以上、初対面会話の大学生の母語場面と日韓の接触場面の話題選択と話題展開を分析した結果、参加者は、学部の「授業」を例とする「大学生活」、学部必須の「留学」の話題が多く、共通性の高い話題を選択していることが明らかになった。これは、同じ大学の学部と共通点が多くあり、

同じ学部の先輩と後輩としての人間関係の構築のためにも共通点を見つけながら会話を進行していると考えられる。話題進行については、学年差が関係しており、日本語母語話者の学年の上位者である先輩Ｊが積極的に話題を開始、展開する傾向があることが分かった。特に、接触場面での会話がその傾向があるという結果になった。FUI によると、日本語母語話者が言語ホストとしての調整を行っていたことも確認されたため、このことも話題の進行に影響があったと考えられる。

話題展開に関しては、母語場面では、一つの話題において互いに質問をし合い、共通の話題や共感を示す相互作用の顕著な「相互型」の話題展開であるのに対し、接触場面では、多くの話題を提示し、先輩Ｊの質問と後輩Ｋの応答の発話連鎖から形成される「一方方向型」の話題展開になる傾向が見られ、日本語母語話者と韓国人日本語学習者とでは、話題展開の方法が異なることが確認された。これは、小林（2018）の初対面場面の情報収集の談話における日本語母語話者と韓国人日本語学習者と談話展開の結果と、髙木（2013）の韓国語母語話者の韓国語の談話展開の結果と同様であるため、韓国人日本語学習者特有の特徴であることが示唆される。FUI において、日本語母語話者は互いの情報や共通点を知るためにも、「相互型」の話題展開を好むと述べており、多くの話題について情報交換を好む韓国人日本語学習者とでは参加意識が異なることも明らかになった。さらに、日本語母語話者は、聞き手の役割にも重きを置き、あいづちの他、感想や共感を示す様々な表現を用いて興味を示す等、相手の発話に積極的に反応しながら、話題展開をしていたことも観察された。

以上のような特徴を踏まえ、日本語の会話教育では、初対面場面では、会話に積極的に参加し、互いに共通点を見つけ、それを深めるために、会話参加者の相互作用に基づいた「相互型」の話題展開の方法や表現を学習することが必要だと考える。具体的には、質問の仕方の他、応答確認、反応や共感の仕方等の聞き手の反応も学習項目として取り扱うことを提案する。また、韓国語母語話者との接触場面において、相手文化における話題展開の方法を理解し、それに応じた参加意識や調整行動を考えるための異文化コミュニケーションの教育への応用も提案する。今後はより多くの初対面会話を対象に分析を重ね、一定の傾向を解明し、その分析結果を日本語の会話教育のための教材開発に応用したいと考えている。

付記

1） 本研究は、科学研究費（若手研究　課題番号 20K13089）「相互作用を意識した会話教育のための教材開発」の研究活動の一部である。

2） 本稿は、韓国日語日文学会 2022 年冬季学術大会（サイバー韓国外大＆ ZOOM（ハイブリット式））での口頭発表の内容を加筆修正したものである。

注

1） 会話の収集、調査は 2022 年 5 月～ 7 月に実施した。調査を実施するにあたり、所属校において、

「教育研究のための調査実施許可申請書」及び、「CIC 調査実施許可依頼書」を提出し、承認を得た。

2） 日本語母語話者用は 11 項目、韓国人日本語学習者用の 15 項目の設問からなる。

3） 日本語母語話者用も韓国人日本語学習者用も共通の 11 項目の設問からなる。

4） 会話は調査協力者の許可を得て、録音、録画をした。収集した会話は、ザトラウスキー（1993）と鈴木（2009）の文字化の規則を参考にした小林（2017）の規則で文字化した。

5） フォローアップインタビューの音声は調査協力者の許可を得て録音した。

6） 中井（2002）の分析対象は日本と米国出身者である。

7） 佐々木（1998）の分析対象者は日本人とアメリカ人、中国人である。佐々木（1998）の会話スタイルの「インタビュー・スタイル」は、本研究の話題展開の型の「一方方向型」と同等とする。

参考文献

宇佐美まゆみ・嶺田明美（1995）「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン ── 初対面二者間の会話分析より ──」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』2、130–145.

小林友美（2017）『日本語教育のための情報収集の談話の展開方法 ── 韓国人日本語学習者の会話教育の提案 ──』早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文

小林友美（2018）「日本語の情報収集の談話の展開方法 ── 大学生と留学生による就職活動の相談の談話を対象に ──」『日本語・日本語教育』2、39–55.

小林友美（2021）「日本人学部生と留学生の質問者による情報収集の談話展開の方法 ── 応答者の質問者に対する印象評価とフォローアップインタビューから ──」『日本語・日本語教育』4、75–88.

佐々木由美（1998）「初対面の状況における日本人の『情報要求』の発話 ── 同文化内および異文化間コミュニケーションの場面」『異文化間教育』12、110–117.

鈴木香子（1995）「内容区分調査における『話段』設定の試み」『国文目白』34.76–84.

鈴木香子（2009）『機能文型に基づく相談の談話の構造分析』早稲田大学モノグラフ 11a 早稲田大学出版部.

髙木丈也（2013）「日本語と韓国語の自然談話に現れる『くり返し発話』」『待遇コミュニケーション研究』10、52–67.

中井陽子（2002）「話題開始部で用いられる質問表現 ── 日本語母語話者同士および母語話者 / 非母語話者による会話をもとに」『早稲田大学日本語教育研究』2、37–54.

ポリー・ザトラウスキー（1993）『日本語の談話の構造分析 ── 勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版.

三牧陽子（1999a）「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー ── 大学生会話の分析 ──」『日本語教育』103.49–58.

三牧陽子（1999b）「初対面インターアクションにみる情報交換の対称性と非対称性 ── 異学年大学生間会話の分析 ──」『日本語の地平線　吉田彌壽夫先生古稀記念論集』363–376. くろしお出版.

三牧陽子（2016）「第 1 章　初対面接触場面における話題管理 ── 接触経験豊富な社会人データをもとに ──」『インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践』3–20. くろしお出版.